

北浦街道探訪記

北浦街道筋の隠れたお宝が沢山あります。地域住民でさえ日頃触れてない処があります。地域づくり部会では、まち興しの企画として「もっと知ろう・伝うよう・つながろう」をモットーに諸活動を行っていますが、お宝が陽の目を見ることができるよう北浦街道探訪記シリーズとして取り上げ「まち協ニュース」に連載しています。この度、今までの5回分について特集として、お掲載しましたのでご覧ください。



北浦街道には調べれば調べるほど沢山の宝が発見されます。新型コロナウイルスを想定した新しい生活様式の一つとして、「温故知新」により今後を模索していただくに良い機会となればと思い、「北浦街道探訪記シリーズ」のリバイバル版を掲載することとしました。あなたの新発見はなんでしょう。ご意見・ご感想をお待ちしています。

1603年(慶長8年)徳川幕府時代の始期により、幕府は体制の維持・強化のために全国の道路網の整備をしました。これに合わせて、1605年(慶長10年)毛利藩は萩を中心に領国の周防・長門国内に藩内道路網を整備されていくこととなりました。

その一つとしての赤間関街道整備では、

- ①中道筋(萩～明木～吉田までの約50km)
 - ②北道筋(長門東深川～俵山～西市～小月までの約43km)
 - ③北浦筋(萩東田町札之辻～赤間関観音崎町までの約105km)
- の三つの幹線が設定されました。

明治維新以降は、こうした中での主要な街道は国道等に指定され舗装・拡張・付け替えが行われて現在に至っています。一方で、維持整備が出来なかった街道は廃道となり忘れられる存在になりつつあります。

北浦街道は、萩藩主の御国廻りの行事の通行路として利用されていたので街道沿線には藩主の休憩場所や宿泊施設として本陣(江戸時代以降の宿場で、大名や旗本、幕府役人、勅使、宮、門跡などの宿泊所として指定された家)や御茶屋などが置かれていました。また、北浦沿岸は低山から延びる丘陵に挟まれた地形が多く、その間に浦が点在していることから、北前船の寄港・停泊や年貢米の回漕に伴う人・物資・情報の流通路として重要でした。さらには、外国船の漂着に備える機能も備えていました。

第1回 赤岸通り



祝第7回下関市景観賞受賞記念
赤岸通り探訪記

古の建物の格子が今もところどころ残ってます。

シリーズ全4回／第1回

赤岸通りのお宝を磨き、
「まちおこし」をしよう！

平成二八年度下関市景観賞を頂いた貴船町の「赤岸通り」にはお宝が点在しています。

この地域は、旧北浦街道で明治二〇年代以降から昭和三〇年代後半までは下関市中心市街地として繁栄していました。今も当時の様子が色濃く残っています。

また、現在の下関市社会福祉協議会・県総合庁舎付近にはかつて下関市役所庁舎があり、そこから唐戸方面に向かって約五〇メートルの間には約一五〇軒の店がひしめいていました。そこに、今でも沢山のお宝があるのです。多くの人々の日常生活の息吹が聞こえ、癒される街並と人情には「温故知新」を感じます。ぜひ一度、古地図を持って散策してみませんか？



〔防火弾〕

これは、ちょっと珍しいお宝！
中を見たいものです。



第2回 旧市役所庁舎

北浦街道探訪記

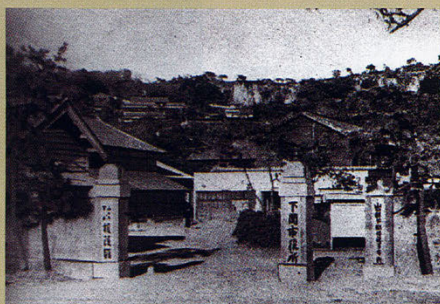
下関市役所本館（昭和三〇年二月一日開庁）は、目下解体され新庁舎の建設が進められていますが、それ以前は昭和二十一年二月一日より昭和三〇年二月まで赤岸通り北東、現在の社会福祉センターの一带（下関重砲兵連隊・七四部隊跡地）に仮住居。市役所に関連して司法書士・弁護士・市営住宅・下関商業短期大学・新聞社・援護館・済生会病院等と多くの関連施設が周辺をとりまいていた。

当時の赤岸通りの賑わいは今でも語り継がれ、名残が伺えます。ところが、昭和三十七年四月に棕野トンネルが開通すると一変。車は田中川沿いの県道を通るようになり、赤岸通りは幸町・奥小路・赤間・唐戸へ向かう買い物道路や散策するに相応しい遊歩道となりました。

一度まち歩きをしてみませんか？

シリーズ全4回／第2回

写真及びキャプションは「しものせきなつかしの写真集」より転載。



旧市役所庁舎①（昭和二〇年代）

昭和二〇年七月二日の空襲で市庁舎は全焼し、下関商工会議所・王江国民学校へ移ったのち、西部第七四部隊跡地へ（貴船町の現社会福祉センターあたり）。



旧市役所庁舎②（昭和二〇年代）

昭和三〇年一月に南部町の現在地へ移転後は、下関商業短期大学の学舎として使われた。



第3回 末廣稲荷神社



●左側写真：明治末期頃の末廣稲荷神社「しものせきなつかしの写真集」より転載 ●右側写真2枚：現在の末廣稲荷神社（当協議会撮影）

北浦街道いまとむかし 末廣稲荷神社

ご存知ですか？
下関(赤間関)最古の稲荷神社
～末廣稲荷神社～



北浦街道探訪記

シリーズ全4回／第3回

中東地区まちづくり協議会部会たより／地域づくり部会

西暦八〇九年（平安時代）、今の赤間町に鎮座された末廣稲荷神社。
御祭神は倉稲魂神（ウカノミタマノカミ）、穀物の豊穰をつかさどる神）です。

戦災に会い消失してしまいましたが、当時は背後に稲荷山が控え、その広い境内には「末廣さんの桜」と親しまれた大きな桜があったようです。今ではその面影もありませんが、現在は奥小路から幸町、そして末廣稲荷の入口にあたる赤間町の道の両側に桜が連なり、毎年春には「桜のトンネル」として多くの人達に親しまれています。

今の末廣稲荷神社は市内の篤志家の皆様のご寄付により立派に再建され、商売繁盛・家内安全の神様として毎月一日、午前九時にお神楽が上がり地元の方々が詣りされています。

皆様もお気軽にお参りされてみませんか。

第4回 辨天湯

北浦街道探訪記シリーズ 第4回

奇兵隊が開湯した！ロマン溢れるお宝

「辨天湯」

萩から奇兵隊の子孫が訪ねて来たと話されたのは現店主の作田賢治さん。

奇兵隊士が幕末から明治時代にかけて栄えていた稲荷街遊郭街（現在の赤間中央通界隈）での開湯なのでさぞかし繁盛したことは想像できる。辨天湯と言う命名もかつて開場していた芝居小屋「辨天座」が由来している。又、この一帯は「辨天座通り」と言われている。なんととも言えないロマンを感じる銭湯である。

その後色々な変遷はあったものの連綿として辨天湯は引き継がれてきた。現在の銭湯（幸町）は、作田賢治さんの祖父が戦後（昭和28年頃？）前経営者から購入されたもの。賢治さんは3代目。祖父の実家は広島県福山市で木材関連の生業をされていたので、木屑（燃料）の有効活用から銭湯が浮かんだようだ。現建物は戦災後に建てられたもので、部分的には補修をされてきたが70年余経過している。下関ではかつて80軒あった銭湯も今では9軒寂しい限りである。

辨天湯は北浦街道の貴重な「お宝」である。銭湯前に何故かお地蔵様が鎮座しておられる。気になる興味深い風景である。下関幸町出身歌手「山本譲二」さんも子供の頃通った辨天湯



をこれからも地域で愛し守り続けいつまでも営業を続けて銭湯文化を守って欲しいと願う。一度辨天湯を訪れませんか。きっと軟水のお湯のファンになりますよ！次回の「北浦街道探訪記」もお楽しみに！（文責…田中）



第5回 赤間中央通り・奥小路通り・幸町通り

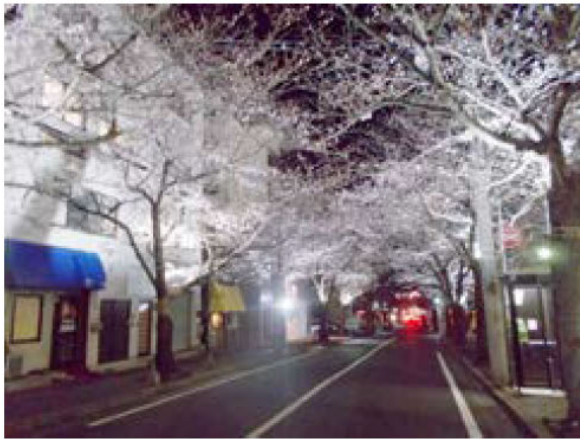
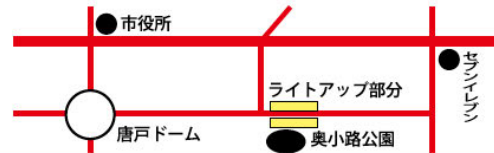
地域づくり部会

□ 北浦街道のまち興し

・奥小路通りの桜並木夜桜ライトアップ

昨年に続き第2回目

3月23日(月)から点灯、4月8日(水)まで毎日18時～24時。



北浦街道探訪記シリーズ 第5回

赤間中央通り、奥小路通り、幸町通りの並木

赤間町と幸町を抜ける奥小路通りは、毎年3月末ごろ、沿道の約80本の桜が一斉に開花し「桜のトンネル」が出来上がります。

知る人ぞ知る市内屈指のお花見スポットがどのようにしてできたのか。約70年間幸町で暮らしておられる豊島自治連合会長さんによると、幸町の桜が植えられたのは今から29年前の平成3年とのこと。実はこの地域一帯には養治小学校がある山側から流れてくる山水が地下水として通っており、この水を生かし、既存のアオギリにかわって植えられたのが桜(ソメイヨシノ)だったということです。

150センチの苗木が、綺麗な水に恵まれ、地元のみなさんに守られながら大きく育ちました。すべての木が一度も枯れることなく現在まで育っているということ、この土地の目に見えない豊かさに驚かされます。

一方で赤間町側は幸町とは異なり、昭和20年頃に「ぶくの・なかを本店」さんが山桜を持ってきて店の周辺に植えたことがきっかけとなって、徐々に桜並木ができあがったそうです。枯れた際に植え替えもなされてあり、少し木は小さめですが、毎年美しい花を咲かせ通る人を癒してくれま

す。桜の花が散った4月～6月にかけては深緑・新緑葉のトンネル、さらに11月半ばから12月には紅葉のトンネルも楽しめます。桜並木は下関市公園緑地課が管理しているほか、散った花びらや落ち葉は沿道周辺のみなさまが毎日のように清掃してくださっており、年に数回は、まちづくり協議会も参加しています。



地域みんなで守り育ててきた桜並木を、中東地区の自慢のスポットとしてたくさんの方に楽しんでほしいものです。

北浦街道の略図

